第 40 回日韓技術士会議に参加して

日本技術士会四国支部副支部長　右城　猛

１．まえがき

10 月 16 日～18 日の 3 日間、山口県の「海峡メッセ下関」で第 40 回目の日韓技術士会議があった。メインは 17 日。9 時から式典、本会議、分科会が行われ、18 時 30 分から日韓親善晩餐会があった。

17 日には同伴した家族のための半日観光旅行「レディースコース」が用意されていた。16 日には日韓親善サッカー大会(北九州市本城運動場)と日韓女性技術士交流会、18 日には研修視察旅行があった。

参加した技術士は、韓国 98 名、日本 226 名の 322 名であった。事務局や家族を加えると、韓国 150 名, 日本 250 名の 400 名で過去最高ということであった。

四国支部からは 17 日の式典と本会議に武山副支部長，加賀副支部長，栗本総務委員長，丸城広報委員長，それに小生の 5 名が参加した。日韓親善晩餐会には、武山氏，栗本氏と小生夫婦の 4 名が参加した。5 名とも日韓技術士会議への参加は初めてである。

「海峡メッセ下関」は、10 階建ての国際貿易ビル(左)、高さ 153m の「海峡ゆめタワー」、イベントホール「アリーナ」(右)から構成されている。

会議は国際貿易ビル、親善晩餐会はアリーナで行われた。

２．式典(9:00～9:50)

式典は国際貿易ビル 10 階の国際会議場で開催された。参加者は約 350 名であった。

日本技術士会中国支部の近藤英樹支部長が開会の挨拶をされ、続いて日本技術士会の高橋修会長、韓国技術士会の韓榮成会長の挨拶があった。その後、山口県の西村亘副知事、下関の中尾友昭市長、韓国総領事の許徳行氏、衆議院議員で前環境大臣の斉藤鉄夫氏が来賓の挨拶をされた。

会議は同時通訳で行われた。韓国語の通訳がとても上手であったので、スピーチの内容をよく聞き取ることができた。

式典が始まる前のステージの様子

同時通訳の音声を聞くためのイヤホーン

会場は約 350 名の参加者で満席。

司会の大田一夫氏

近藤英樹中国支部長

下関市長の中尾友昭氏による挨拶

高橋修会長

韓榮成会長

許徳行駐広島総領事

斉藤鉄夫衆議院議員

韓会長は、下記の挨拶をされた。

- 日本技術士会と共に外務大臣表彰を日本大使館で授賞できとても名誉なことである。
- 来る 50 年、100 年には韓日中 3 カ国の技術士会が交流し、協力できる会議にグレードアップさせ、北東アジアだけでなく、更には世界的な技術発展、交流と協力のために韓日両国の技術士会が主導的役割を果たせるように協力して行きたい。

また、韓会長は、日韓親善サッカー大会に出場した選手、日韓女性技術士交流会に参加したメンバーに起立するように促し、敬意を表された。

挨拶される副知事の西村亘氏

日韓技術士会議の会旗

３．本会議・基調報告(10:00〜10:20)

本会議は基調報告と基調講演よりなっており、日本と韓国からそれぞれ発表があった。

基調報告では、日韓技術士会議実行委員会の中山輝也委員長が下記の報告を行った。

- 今年の 7 月に、日本技術士会と韓国技術士会が外務大臣表彰を受けた。
- 1971 年に韓国の申し入れを受けて日韓技術士会議が始まり、以来、毎年、韓国と日本で交互に開催されるようになった。

・　今回の準備のため、日本での委員会は 11 回、韓国との日韓合同会議を 2 日間、韓国の朴委員長と山口県技術士会を交えた合同会議を 3 回実施した。

韓日技術士交流委員会の朴慶夫委員長からは下記の報告があった。

・　シンポジウムが 40 年間持続して開催できたのは、日本と韓国の技術士の信頼があり、交流、協力を行ってきたためである。
・　両国の女性技術士や青年技術士の積極的な参加がシンポジウムを大きく発展させた。
・　地球温暖化、気候変化対応、探査排出量削減、エネルギー効率化、環境・資源危機問題を解決するには、技術の発展が必要である。
・　シンポジウムで建設的な議論を行い、智恵を出して具体的、実践的対案を出されることを期待する。

中山輝也委員長

朴慶夫委員長

４．本会議・基調講演(10:20～12:00)

今回のシンポジウムのテーマは、「グリーンテクノロジーと技術士の関わり」であった。日本からは、中国支部副支部長で日韓技術士会議実行委員会委員の伊藤徹氏が話題提供をされた。要点は下記の通りであった。

・　グリーンテクノロジーは、CO2 を減らし持続可能な社会を構築する上で重要な技術である。
・　地球温暖化問題は、産業革命以降のストック依存型消費システムが、自然生態系におけるサイクルバランスを崩壊させたのが原因である。
・　「低燃費」「低炭素化」「廃棄物最小化」「再生可能」「資源循環」をキーワードとした環境保全に関する技術がグリーンテクノロジーである。
・　地球循環システム構築を実現させるためには、「自然の力を生かす」「生物を豊かにする」「生物を活用する」「異なる分野の技術をコーディネートする」ための技術が必要である。
・　技術士の役割は、先進的科学技術を先取りし、異なる分野の技術を取りまとめ、分かり易く説明し提案することである。

基調講演をされる伊藤徹氏

韓国からは、前韓日技術士交流委員会委員長で現在は顧問の李康建が、「緑色成長の実現のための緑色技術の開発と技術士の役割」と題して発表された。

「人類の文明は農業革命、産業革命、情報革命、緑色革命と変化している」として、アメリカ、日本、イギリス、ドイツ、中国、韓国がそれぞれどのような緑色成長政策を執っているかについて述べられた。そして、今後における緑色技術開発、商品化方策、技術士の役割について述べられた。

二人の基調講演の後、伊藤氏の講演に対しては韓日技術士交流委員会顧問の全相伯氏が、李氏の講演に対しては、日韓技術士会議実行委員会委員の田中俊生氏が意見を述べられた。

基調講演をされる李康建氏

討議を行う全相伯氏(左)と田中俊生氏(右)

５．分科会(13:00～17:00)

午後からは下記の５つの専門分科会に別れてシンポジウムが行われた。

第 1 分科　環境・資源・エネルギー・国土・観光
第 2 分科　建設・安全・防災・交通
第 3 分科　技術士倫理・技術士資格・FTA
第 4 分科　電気・電子・情報・通信・機械
第 5 分科　英語発表

６．会議用資料

会議用資料として、下記の資料が配付された。

- 第 40 回韓日技術士合同 SYMPOSIUM 資料、韓国技術士会、A4 版,211 頁.
- 第 40 回韓日技術士合同 SYMPOSIUM 参加者名簿、韓国技術士会、A4 版, 9 頁.
- 技術交流と友情を分ち合う 40 年の歳月、韓国技術士会、B5 版、13 頁.
- 第 40 回日韓技術士会議資料、日本技術士会、B5 版、89 頁.
- 第 40 回日韓技術士会議参加者名簿、日本技術士会、A4 版,8 頁.
- 日韓技術士会議 40 年誌－交流の記録－、日本技術士会、B5 版、201 頁.
- 日韓技術士会議 40 年の想い出－参加者の余言録－、日本技術士会、日韓技術士会実行委員会、B5 版、258 頁.

今回は節目の年であったので、40 年間の交流の記録や会議参加者の思い出を綴った立派な冊子が参加者に配布された。実行委員会の委員の皆様の会議にかける熱意が痛いほど伝わってきた。

韓国技術士会で作成された資料は、漢字(繁体字)とハングル語で書かれていた。通常であればハングル語だけのはずである。一方、日本技術士会の資料は、外来語にカタカナではなく英語が用いられていた。会議資料をこのように書くことにしているのは、お互いの理解を容易にするための配慮なのであろう。

７．日韓親善晩餐会

日韓親善晩餐会は、18 時 30 分よりアリーナ 4 階で同伴者も一緒になって開催された。会場にはテーブルが 37 卓並べられ、各テーブルに 8 人から 10 人が座れるようになっていた。約 350 名の参加があった。座席は日韓の技術士が混ざって座るように決められていた。

日本人が最初に着席し、韓国人を拍手で迎えるという趣向であった。韓国人の女性は民族衣装のチマチョゴリで入場してきた。

晩餐会は，近藤英樹中国支部長の開会の挨拶で始まり、日本技術士会の高橋修会長、韓国技術士会の韓榮成会長会長が挨拶をされた。韓会長は、次回の会議には中国をオブザーバーとして参加してもらい、将来的には韓日中の技術士会議に発展させたいと述べられた。続いて山口県商工会議所の方が来賓の挨拶をされ、中尾友昭下関市長による乾杯の音頭で晩餐会が始められた。

会場には、通訳の方がたくさん来られていた。同じテーブルの呉大榮さんに通訳を介して韓国語について質問をしたところ、「ハングル語が一般的であるが、40 歳程度以上の者であれば漢字も習っているので読み書きすることができる」「文章はハングル語のみで書くのが一般的」ということであった。

晩餐会が始まって 1 時間ほど経ってから、下関の太鼓と笛の演奏が披露された。その後で韓国女性陣が舞台に上がり、アリランなどの朝鮮民謡が披露された。普段集まって合唱の練習をしていたわけではなく、この会場に入って少し練習をしただけということであったが、よくまとまって素晴らしい合唱であった。

続いて、日本人女性も舞台に上がり、「もみじ」「ふるさと」「おぼろ月夜」の三曲が披露された。

チマチョゴリで民謡を披露する韓国人女性

着物で唱歌を歌う日本の女性技術士と同伴女性

中締めの挨拶をされる牧山照彦氏(左)と閉会の挨拶をされる岡村悦男氏(右)

2 時間が経過した 20 時 30 分に、日韓技術士会議実行委員会委員で前中国支部支部長の牧山照彦氏から中締めの挨拶があった。当初の案内で晩餐会が 18:30～20:00 となっていたこともあり、退席する人はほとんどいなかった。名残惜しくて中締めが閉会の挨拶であることを知らない振りをしていたのかもしれない。

20 時 40 分に山口県技術士会会長の岡村悦男氏が閉会の挨拶を述べ、日韓技術士会議の今後の発展を祈って万歳三唱で親善晩餐会を終えた。

８．あとがき

私は、これまで日韓技術士会議にはあまり関心をもってこなかった。日本技術士会中・四国支部の時代には中国地方の技術士の方々が中心になって活動してくれていたので、甘えてしまっていた。

しかしながら、そのようなことを言ってはいられなくなった。今年の 6 月に日本技術士会四国支部が設立された。会員数 300 余名の最小の支部ではあるが、支部を設立したからには、四国でも日韓技術士会議の開催をしなければならないからである。その時に備えて、いまから勉強しておかなければならないと考えて、夫婦で参加した。

会議に参加して、日韓技術士会が 1971 年から毎年休むことなく、40 年間韓国と日本で交互に開催し、技術交流と友好親善を図ってこられたこと、その功績に対してわが国の外務省から日韓両国技術士会が合同表彰されたことを初めて知った。

最初の頃は、両国合わせて 20 名程度の小さな会議であったが、今では 400 名が参加する大きな国際会議に成長している。日韓技術士会議にかける関係者の情熱と努力には敬服させられる。

今回の会議で韓国技術士会の韓榮成会長が述べられていたが、将来的には中国も加えて更に大きな国際会議に発展する可能性がある。大きな国際会議を地方で開催するには、解決しなければならない問題が多々あるが、開催地の特産品や観光地を世界に紹介できる絶好のチャンスとなる。また、技術士の存在意義を行政や市民に認知してもらえる良い機会にもなる。

今回の日韓技術士会議は、設立 40 周年に相応しい素晴らしい会議であった。会議の準備や運営にご尽力された日韓技術士会議実行委員会、日本技術士会中国支部、山口県技術士会の皆様に心より敬意を表します。

(2010 年 10 月 20 日)